

特集

ソーシャル・キャピタルと地域の子ども支援

山中 智代

二葉パンダ食堂・パンダほおむ

豊中市では、市民団体・事業者・行政などが連携し、地域の子ども食堂や無料・低額の学習支援といった多様な子どもの居場所づくりを先駆的に進め、子どもたちを支えてきた。コロナ禍以降の現在において、子どもたちの居場所はどのような状況に置かれているのだろうか。

豊中市南部で月に1回弁当の提供を行う「二葉パンダ食堂」と子どもたちの居場所である「パンダほおむ」は、令和4年（2022年）の春から始まった新しい活動であるが、地域での人のつながりを生かして、早くも多くの子どもたちを始め地域の住民が集う場所となっている。この活動に携わる山中智代さんに、これまでの経緯や地域、子どもたちとの関わりについて伺った。

1. 「二葉パンダ食堂」「パンダほおむ」を始めたきっかけ

——山中さんが「二葉パンダ食堂」を開かれたきっかけをお教えてください。

この活動をしている校区の庄内西小学校でPTA会長を5年前にしていまして、それがきっかけです。副会長を2年、会長を1年、参与を1年務めたのですが、PTAをしていると地域の課題がすごくよく見えますし、ここの校区限定での人脈を活かして地域の方が集う場を作りたいと思ったからです。

——地域の課題とは。

小中学校の統廃合がこの辺りで進んでいまして、4年後に千成小学校の跡地で（仮称）南校ができます。そうすると庄内西小校区の子は通学距離が伸びるのですね。私がPTA会長をしていたときに、その統廃合の話が出始めて、不登校児のことが気になっていました。いまは1クラスしかない学年が多くて、それが解消されるのは統廃合のいいところですが、新しい学校に慣れるまでの間に、ちょっと遠くなることで不登校児も増えるのではないかと保護者目線で思いました。そういう時に、近所に家以外で、いろんなことが話せる場所があったらいいだろうなという、当初はそういう気持ちで始めました。

——そのあと、居場所としての「パンダほおむ」

特集 ソーシャル・キャピタルと子どもたち

も始められたのですね。

そうです。地元の方から「何かやる時空き物件あるから、言ってくださいね」って声をかけてもらっていたのですが、月1回の二葉パンダ食堂をやっているうちに、やっぱり子どもたちを近所で見守ってあげた方がいいなあとと思って、それならいっそのこと私がやろうかっていう、本当にそういうスタートだったんです。

ここの備品もほとんどが貰いものです。近所にリユース品を集めている人がいて、賛同して分けてくれたので、お金もかけずにできました。パンダほおむの場所は、昔、魚屋さんだったんです。だから土間と手洗いできる場所があって、子どもたちが汚しても水洗いできますし、すごく使いやすいです。

——地元の方やリユース品を分けてくれた人とはもともと知り合いだったのでしょうか。

4年間PTAで校区の地域活動をして、関わり続けてきたので、そこでのつながりです。今から考えると、全部PTA時代のつながりから始まっています。今、とよなか地域創生塾でも学んでいるのですが、そこで「ソーシャル・キャピタル」について調べた時には、「これは私のことだ(笑)」と本当に思いました。学べば学ぶほどそう思いますね。

いま手伝ってくれているもスタッフも実はPTA時代の仲間、お互いに信頼関係があるし、得意不得意も分かっているの、仕事もパッとスムーズにできます。PTAの役員をすると大変だと思われているかもしれませんが、意外といいこともいっぱいあるとおすすめしたいです。

——PTAに関わるようになったきっかけは。

私もこの校区の卒業生だったのですが、子どもが小学校に入ったときにPTAの役員をしていたのが、昔子ども会で一緒に遊んでいたお兄ちゃんたちだったのです。いま私の活動に協賛いただいている社会福祉法人の理事長もPTA時代の仲間で、校区で活動するので協賛してほしいと言うと、二つ返事で協力をしてくれました。

2. 食堂、居場所の日常

——「二葉パンダ食堂」「パンダほおむ」の活動内容や利用状況について教えてください。

二葉パンダ食堂は多世代型地域食堂で、子どもだけではなく高齢者の方にもちょっと楽しみにしてもらえるような月1回のイベントにできたらいいなと思って始めました。高齢者の方にもたくさん来てもらっています。人数は大人と子どもが半々くらいですね。毎月お弁当配布にフードパントリーを併設して、お米やレトルト食品、調味料など選んで持って帰れるようになっています。大人からは300円いただいて、子どもは無料です。

お弁当は1回に100食作ります。100食作ってほぼ売り切れることが多いです。

パンダほおむは週に1回水曜日と土日に不定期で開けています。おやつを食べにだけくる子どもも合わせると、約40～50人の利用があります。おやつは毎回無料です。極力、手作りしたものにしよう頑張っています(笑)。オープン当初から今まで、臨機応変に形を変えて運営してきました。

——パンダほおむには地域の子どもたちがたくさん集まっているのですね。

そうですね。だいたい同じメンバーが集まっ

ていますが、口コミで聞いて初めての子どもも来ますよ。パンダほおむは校区の子の居場所になっていて、二葉パンダ食堂に関しては地域の外からも来られています。

パンダほおむでは私たちの目の届くところで、子どもたちが遊んでいます。ここにはwi-fiも、テレビのアンテナもつなげていません。ちょっとDVDを見られるぐらいにしているだけです。子どもたちには、何もない中で想像して、遊び方を考えてもらった方がいいと思っています。

あと、初めての試みなのですが、年少・年中の子がたくさん来るイベントを企画しました。水曜日の活動は小学生の居場所になっていて、定員もあるし、未就学のおさんは保護者同伴してくださいって言うので、平日の利用が未就学の方にはなかなか難しいんですね。それで、ハロウィンに合わせて、日曜日にクレープを食べる会をすることにしました。これは予約を取ったのですが、未就学のおさんですぐ

に予約が埋まりました。小さいお子さんがいる方もやっぱり利用したかったんだと思います。また未就学デーみたいなものを作ってもいいかなと思いますね。

——始めてから1年も経っていないのに、パンダ食堂に毎月100人近く来られ、パンダほおむに毎週入りきらないほど子どもたちが来るのはどうしてなのでしょう。

市民活動についてはまだ本当に新米なんです。ただ、地域の中に住んでいて、子どもの通学路の見守りをいまのパンダ食堂のメンバーとずっと続けてきました。登校時注意が必要なところがあって、そこを通る子どもの保護者が当番で立つようになっているのですが、保護者が来られない時もあるって危険だということが、PTA時代から気になっていたのです。だから卒業して4年間OBだけで保護者のプラスアルファで立っています。そこで子どもと顔がつか



【写真1 山中智代さん（左奥）】（写真を加工しています）

がっているのです。地域の子は私の顔を見ても怪しまないんです。ただ、悪さする子には普通に遠慮しないで叱るので、「あのおばちゃんこわいけど、面倒見てくれるなあ」みたいな、そんな立ち位置ですね（笑）。お母さんなど保護者がいてもきちんと叱った理由を伝えます。おせっかいの極みですね。だから本当に子どもを集めるのは全然難しくなかったんです。

——では逆に難しかったことは？

高齢者の方にもうちょっとアプローチしたいと思っているのですが、難しいところもあります。

二葉町の民生委員さん、自治会長さん、婦人会長さんの協力で、独居高齢者の方にお弁当の宅配を始めました。約20世帯にお弁当を届けます。まだ始まったばかりなのですが、これから信頼関係が出てきたら困りごとなど話してくれるのではないかと考えています。

あとは子どもでも、本当に支援したい子って、例えばこれをあげたいとか、これを持って帰ってねと言っても、すぐには受け取ってくれないんですよね。パンダ食堂のお昼ごはんのお弁当なら、食べに来られたり、持って帰ったりできるけど、それ以上となるとなかなか難しい時もあります。まずは関係性をつくることから始めています。

パンダ食堂については、本当は会館で食べて帰ってもらう取り組みをしたかったんですけど、コロナ禍っていうのもあって、お弁当になりました。毎回90食以上の利用があるのに、会館で全員食べるスタイルは無理なので、パンダ食堂はお弁当配布を継続することになるんじゃないかなと思っています。

3. PTA からつながりを広げる

——活動を始められたころから変化したところ
はありますか。

高齢者の方の情報をまだあまり持っていないのですが、少しずつ高齢者の方と距離が近づいてきているかなと思います。あと、街を歩いていたら「パンダのおばちゃん」って毎日誰かに言われますね。小さなお子さんもパンダ食堂に来てくれているんですけど、「あ、パンダの！」とか言われるから可愛いですよ。名称もパンダ食堂にして正解だったかもしれません。

——PTA で活動されていたころに比べて、パンダ食堂やパンダほおむという新しい活動を重ねることで、地域や子どもたちについて、新しく分かったことはありますか。

PTA 時代にはちょっと警戒されていた時があったんです。だけど今はもう何も所属がないから、フランクに近寄りやすくなったところはあるみたいです。ただのパンダのおばちゃん、私の子どもは大きいので、小学校と直接関係がなくて、その方が家庭のこととかも言いやすいみたいです。適度に離れているから言えるっていうのがあるんじゃないかなって。だから、もっと早く年齢を重ねたいなと思っています（笑）。その方がいろいろ相談しやすくなるんじゃないかなって。

いかに近寄りやすい人物像になるかということその時思いました。人にしんどいですよってなかなか言えないので、それを言える存在になるというのが、やっぱりこちらの課題です。子どもは結構話しかけてくれますけど、親が変

¹ ごはん処おかえり（庄内西町）のことを指す。多世代型地域食堂として、子どもや困窮した大人への食事提供を

行ってきた。現在は、店頭での弁当の配布（「ただ飯」）を行っている。

わらないと子どもの生活も変わらないと思うので、大人にももっと心置きなく話しやすい、パンダのおばちゃんになるのが目標です。発達障害をお持ちのお子さんの親御さんともつながるようにもしています。課題のあるご家庭に寄り添いたいと思っています。パンダほおむを子どもたちが来るよりちょっと早い時間に開けて、必要ならばお母さんとしゃべる時間を設けたりもしています。

——パンダほおむの運営についてですが、協賛している企業や団体がたくさんあります。どのようにしてつながって協賛を得たのでしょうか。

協賛してくださっている企業さんや団体さんには、私が全部声をかけました。飛び込みで行ったところもあります。たとえばある会社の役員さんは、同じ校区での保護者としてのつながり

がありましたし、私がボランティアでお手伝いに行っていた社会福祉法人さん、そうしたもとのつながりもありました。

ほとんどはPTAのつながりからですね。飛び込みで行っても窓口にはPTAの知り合いがいて案内してくれたところもあります。

多世代食堂や子ども食堂では、おかえりさん¹と豊中本町子ども食堂さんにも協賛いただいています。おかえりを運営している上野さんにも、私は飛び込みで会いに行っただけです。パンダ食堂を二葉会館にするのも上野さんが、それだったらすぐできるんじゃないのと発案してくれて、最初の回のお弁当もおかえりさんが全部用意をしてくれました。本当に後ろ盾になっていただいて、そこから自分たちの地域にあったやり方や、私のキャラクターにもあったやり方で活動を増やしていきました。最初は自力で立ち上げをしたくて、同じように自分でやっていらっしゃるおかえりさんを頼ったんですね。それで、しっかり基盤ができてからだんだんと地域につながりを広げていきました。

4. 今までのことをすべて活かして

——「二葉パンダ食堂」や「パンダほおむ」をやっている苦労した点や良かったことなど、印象に残ったエピソードをお聞かせください。

苦労した点は本当に、思い当たりませんね。本当に人を集めるのが一番難しいと思うんですけど、そこに苦労がなかったんです。面白いですね。ずっと地域の真ん中に居るからじゃないでしょうか。地域に住んでいる、PTAでずっと活動し続けてきた、今度はそこで市民活動をするという、縦線がつながっていることが、困らない要因だと思います。

良かったことは、本当にしんどい世帯の子どもの表情が変わってきていることですね。だん

【写真2 二葉パンダ食堂ちらし】

特集 ソーシャル・キャピタルと子どもたち

だんこちらを受け入れてくれるようになったんですよ。何かしてあげたい子ほど、あげようとしてもずっと「要らない」って言っていたんです。それが「今日は何々食べる？」って言ったから「うん！」って言うようになるようになってきたっていうのが本当に嬉しかったです。

子どもたちは、学校でちょっと嫌なことがあったら、ここで言うてくれていると思います。週一回会っているだけでも、そうになりましたね。「今日は〇〇君、どうしたの？ すごくククク言葉が多いけど何かあったん？」って声を掛けたら、「今日は～～ちゃんに、こうやって言われたからイライラしてんねん」って言うんです。学校で起こった出来事は結構話してくれています。

この間は襖が穴だらけになっていたんです。今の家は襖がない家が多いから簡単に破れると思わなかったのか、ちょっといたずらをしたのかは分からないのですが、当初より穴が増えていたので、そのままにせずスタッフと穴をわざと紙で塞ぎました。それで、大事に使ってねということを今度は言おうと思っています。ただ、「誰々がした」とかは聞かないし、「誰々がしていたって言いに来ないで」と言ったうえで、約束の下で今から気を付けてくれたらいいからって言います。みんなの場所で長く利用したいし、この家は借りているから大事に使ってねということを話さないといけないと思っています。

あとは、おやつがやっぱりただで食べられると、それが当たり前になるところがあるんですね。どうしてももらえているかというのをちゃんと説明しました。パンダに来ている子どもたちに食べさせてあげてねってお金をいただいているから、みんなにお渡しできているんだよ、と。食べきれないものまで手を出さずにちゃんと食べ

切ろう。もったいないことをした時は厳しく注意します。

——司会のお仕事をされていて、その時の営業の経験などもつながっているのでしょうか。

そうなんです。今までのやってきたことが全部パンダに活かされていると思います。だからもう本当に何か運命だと思っているんですね。あとは、やはりPTAの経験だと思います。

——とよなか地域創生塾で、今年塾生として学ばれていますね。

第6期生です。おかえりの上野さんが第2期生で「創生塾面白いよ」と言われて、行ってみますってすぐ申し込んだんです。上野さんが「創生塾がなかったら今の自分はなかった」とおっしゃっていて、それで興味がありました。

実際に参加して、これまでとは出会わないタイプの人と出会ったと思います。いろんな人がいて、本当に面白いですね。私が高齢者の方にお弁当持って行こうと思ったのは、創生塾のメンバーとの関わり、影響があったからなんです。グループを作って企画を立てていくのは大変なときもありますが、これも全てに意味がある、と前向きに捉えていく方がいいんじゃないかって私は思っています。

聞き手：

平田 誠一郎（とよなか都市創造研究所 研究員）

比嘉 康則（とよなか都市創造研究所 研究員）

石村 知子（とよなか都市創造研究所 主任研究員）

インタビュー実施日：令和4年（2022年）10月26日